
The world which is in a state of flux(仮題)

樋口

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The world which is in a state
of flux (仮題)

【Nコード】

N5513Z

【作者名】

樋口

【あらすじ】

人のように考え、人のように動き、自律成長プロトコル アル
ゴリズムによる精神の成長を可能とする人工知能の実現すら叶う時代。

二十二歳という若さで名だたる著名画家の仲間入りを果たした詩歌の元に、ある日身に覚えのない荷物が届く。

送り主の分からない怪しげな荷物を訝りつつも、閉塞した気分が紛れるならと一時の酔狂に身を委ね、開封して調べてみることに決め

る。

果たして、中に入っていたのは用途の不明な機器と、一枚の紙片だった。

これだけでは掴めない。

詩歌は機器の特徴ある形状と紙片に書かれた文字を頼りに、次世代のマルチメディアプレイヤーとして普及している』で検索を試みる。

若干長めの接続時間のあと、表示されたのは膨大な数の検索結果。

その中で一際目を引く“『公式情報サービス』”というページを覗き、概要説明文にあった『新しい世界』というフレーズに惹かれた詩歌は、数多ある他のホームページに目を通してから規定の手順に従い、電子世界と呼ばれる未知の領域へ飛び込む。

ただひとつ、自身の性別を男性と偽って。

第一章“幸せの絵画”一話（前書き）

はじめまして、作者の樋口と申します。

この作品は一見SF風味のようですが、出来ればファンタジーとして読んでいただけたらと思っています。

さて、プロットや構想、詳細な設定を書き留めるために、この作品機能を使っているのですが、編集に不慣れで構想の一部が公開設定になってしまっています。

検索にはかからない設定にしていますが、度々こんなことが起こるかもしれませんので、出来るだけご覧にならないようご注意ください。

第一章“幸せの絵画”一話

「ねえ、いるんでしょう？」

玄関の向こうから聞き慣れた声が届く。

その声を努めて聞き流しながら、詩歌^{しいか}はすぐ傍にある居間の床で毛布にくるまり、胎児のように丸くなっていた。

「ちよつと！　ここ開けなさいよ！」

やけに通る怒声と共に扉を叩く音が何度も続き、室外の喧騒に詩歌は思わず「うるさい」と口にしてしまう。

少し前は会うものの生返事しかせず、最近になって会おうとすらしなくなったからか、彼女の反応は顕著だった。

一際大きく詩歌の名を呼ぶと、太鼓を思わせる速さでひっきりなしに戸を叩き始める。

しかし、それも長くは続かなかった。

詩歌の貫徹した無視に、もう反応を返すつもりがないと悟ったのか、やがて場は静まり返る。

怖いくらいの静寂が満ちる中で、詩歌は後ろめたい思いで嵐が過ぎ去るのを待っていた。

怖かった。

彼女が善意から来てくれていると知っていても、気心の知れた友人である彼女が相手だとしても、詩歌は誰かと向き合つのを恐れていた。

「なんで出てこようとしないのよ……」

嘆くような、悲しむような呟きを聞いた時、玄関の向こうで苦虫を噛み潰したようにしている彼女が目に見えようだった。

そんな言葉だけを残して、彼女は去っていく。石畳に立つ硬質な足音が早く遠ざかるように祈りながら、詩歌は消え入るように一言「ごめんね……」と漏らした。

足音が聞こえなくなり、くるまっていた毛布から這い出すと、詩歌は玄関扉に付いた郵便受けから外の様子を窺う。

本当に誰もいなくなつたか念を入れるためだ。

自分でも笑えるくらい神経質な行動に、嘲笑いが零れる。いなくなつたと思わせて油断を誘う。

彼女がそんな真似をするはずがないのに。

本当に自分一人であると確信を得た詩歌は、自らが住むマンションの一室を見渡す。

殺風景な部屋だ。

高層建築の粋を凝らして建てられたこのマンションは広く、十人でも易々と暮らしていけそうなのに家具が必要最低限あるだけ。

古臭いブラウン管のテレビに、寝具とクローゼット、申し訳程度にソファがあるくらい。

詩歌はこのマンションが好きではなかった。

生きていくのに必要なくらい広い部屋も、庶人を寄せつけない格調高い外観も、息が詰まってしまうそうになることはあれど、喜んだことはない。

玄関の隅で蹲っていれば彼女に騒がしくされる。

そう分かっていても狭い玄関から動かないのは、広い部屋でひとりいる時間がどうしようもなく嫌いだからだ。

倦怠感を打ち払うように頭を左右に振り、リビングに向かって重い足取りで歩いていく。

このマンションは、著名な画家として恥ずかしくない家に住むべきだと、父親に厳しく言いつけられ、母親にやんわりと強制された結果だった。

インテリアに口出しされないのは誰かを招く必要なんてなく、このマンションに住んでいるという体裁さえ保てれば十分だと判断されたからだろう。

益体もないことを考えているうちに、リビングに辿り着いた。

これまた高級そうなドアを開けて入り、部屋の隅に置かれた画布を目指し歩いていく。

脚立で立てられた油絵用の画布には、布が被せてあった。

乱暴に布を取り払う。

投げ捨てられた布が床に落ちる音を聞きながら、詩歌は晒されたキャンバスを眺める。

そこには、完成した『作品』が描かれていた。

小さな頃から、絵を描くのが好きだった。

自分の思い描くものを目に見える形で現実のものにできる絵の世界に没頭した。

家族が笑い合う光景も、怯えるように自分から距離を置く妹と仲睦まじく遊ぶ場面も、切望し手に入れられなかつ幸せを、平面上になら幾らでも生み出せる。

それは仮初めと呼ぶのも烏滸がましい虚構の幸せだったけれど、

当時、孤独に潰されそうだった自分を絶望の淵から救ってくれたのも確かだった。

だけど、今は……。詩歌は目の前にある『作品』を感情のない、淀んだ瞳で見つめた。

テーマは『悲劇』。

長い時間をかけて二人の間に横たわるしがらみを乗り越え、分り合えた兄弟に襲いかかる不幸。

兄は迫り来る異国の大軍の前に立ちほだかり、軍人として、兄として、また一人の人間として、愛する祖国と弟、そして幼い頃のように純粋な気持ちで笑い合える未来を守ろうとする。

死地に次ぐ死地を潜り抜け、遂には祖国を勝利に導き凱旋する兄であったが、兄の心変わりを知った王は自身の後ろ暗い所業が白日の下に晒されるのを恐れ、忠誠を誓い墓まで秘密を持つていくと心に決めていた兄を弓矢で射抜く。

凱旋中に矢を胸に受け、慌てて駆け寄ってくる弟とざわめく民衆の前で悲哀に叫び、睫毛を濡らす兄の姿を写實的に描いたのがこの絵だ。

そう、悲劇だった。

詩歌は複雑な思いでその絵を眺め続ける。

自分に『悲劇』や『惨劇』を描き出す才があると知ったのは、いつの頃だったろう。

作られた『幸福』を一枚、また一枚と描き、大きくなるにつれて、絵が嫌いになっていった。

幾ら『幸福』を描き出しても現実には何ら影響を与えず、素っ気なくあしらわれ、優しいように空っぽの言葉をかけられ、くぐもった悲鳴を上げて後ずさられる。

虚実に過ぎないのだと思い知らされる。

今では絵を好きなのと同じくらい、絵が嫌いだった。

「わたしは何をしてるんだろう……」

シミ一つない真っ白な天井を見上げ独白して、しかしすぐに仕事だと気づく。

明日には、次に描かなければならない『悲劇』を描くための画材が届くはずだ。

益のない感傷に浸っている暇はない。

そう自分に言い聞かせて、詩歌は明日に備えて準備を進めていく。

作業中、先程口にした独り言が頭から離れることはなかった。

第一章“幸せの絵画”二話

画材が到着する日、詩歌は朝から憂鬱な気分でリビングに寝そべっていた。

ガラス張りの窓からどんよりと曇っている空が見えて、気持ちの沈みに拍車をかける。

今ばかりは嫌いなリビングも気にならない。

原因は一本の電話だった。

『近々、お前の伴侶となるに相応しい男を紹介する』

父からの電話だ。

やたらと話が長かったけれど、簡潔にまとめるとこの一点に凝縮されるのだろう。

後は振る舞いについての叱咤と、言葉面をなぞる程度の激励。

この二つのやり取りは毎回と言っていいほどあり、半ばルーティン化されているので然程重要ではない。

てつきり、今回も決まり切った話をするものとばかり思っていた。

……あと、いつもと違う言葉が交わされることにほんの少しの期待も。

電話が終わった今、気分はどん底だった。

悪い意味で裏切られた期待。

紹介するだけ、とは言っても、父の中で婚約は既に決定事項なのだろう。

式の日取りも式場も、果てはウェディングドレスや参列者の選

定すら始まっているのだと確信できた。

違うとすれば神前式かもしれないというくらい。

昔からそうだった。

父は恐ろしいまでに玄人主義を信奉する人で、選良という枠から外れることを酷く嫌う。

娘である自分をよかれと思う方へ牽引し、同時に父の社会的立場を揺らがせない保険ともする、徹底した合理精神の持ち主でもある。

進路に関することは父が取り決め、自分はそれに唯々諸々と従うだけでいい。

父は心の底からそう考えているのだ。

まだ小さかった頃から、父は必要以上の関心を自分に持たなかった。

いつも念頭にあるのは、如何に下手な振る舞いをさせないかであつて、意思は二の次だった。

医者や弁護士、学者に議員、実業家など、辣腕の人間ばかりを生み出す織倉の血筋。

そこにあつて、自分は一人前と認められていないのだと、かつての詩歌は考えた。

絵の世界でなければ、商社の役員にでもなっていただろう。

しかし描画の才があると知り、中でも『悲劇』や『惨劇』を表現する適性は類い稀だと気づいた時、詩歌は『幸福』を描くことをやめた。

ひたすらに『悲劇』や『惨劇』の絵を描き、才に磨きをかけ、その末に描いた絵で名誉ある賞を受賞した日、父から本邸に来るよと言われた。

狂喜した。

いつもなら電話の口頭で済ませるのに、今日は直接会うと言うのだ。

今にも踊り出しそうな心を必死で抑え、自然と弾む声で了承する。

これで父に認めてもらえる。

いつもは威圧的に映る本邸が、その日は快く迎えてくれているように見えた。そして、急ぎ本邸に向かった先で言い渡されたのは、転居を促す提案と、立ち居振舞いに一層気を配るよう念を押す言葉。それだけだった。

肩を落として消沈する帰り道、考えたのは、もっとたくさんの結果を示さなければいけない。

そうすれば、いつかきつと認めてもらえる。

そう、自分に言い聞かせた。

それから今に至るまで精進を心がけ、幾つもの栄えある賞を獲得って。

経歴にそれらが積み重なるのと同じ数だけ落胆した。

今や、国内外にその名を轟かせていると自負してもいいほどになった。

なつて、しまった。

床に華奢な身体を投げ出したまま、詩歌は自分の肩を抱く。

結局、自分はどこまでいっても、都合の良い人形でしかないのだろうか。

視界に入っているフローリングの若木色が滲む。
泣いているのだと気づいた。

一度でもいい。

父に、母と妹に、自分を見て欲しかった。

絵に描いたものじゃない、本当の笑顔で笑いかけて欲しかった。

そう思うのは、間違っていたのだろうか。

自分には過ぎた願いだったのだろうか。

……分らない。

詩歌は抱いている肩を更に抱き締めた。

強く、強く、肌に爪が食い込むまで。

このまま、好きでもない人と結婚して生きていく。
あるかどうか分からない希望にすがって、『悲劇』や『惨劇』
を描き続けて。

限界だった。

度重なる落胆に疲弊して傷だらけの心が、精一杯気丈に振る舞
っていた心が、砂の城を蹴飛ばしたように崩れていく。

痩せ我慢で塗り固めた心は、砂上の楼閣でしかなかった。

不意に、来客を知らせる甲高い電子音が鳴り響く。

失意に暮れていた詩歌は最初のうち、気づきもしなかった。

しかし繰り返し鳴らされていると漸く気づく。

緩慢な動きで立ち上がり、よたよたと玄関に向かう。

一体何の悪戯だ、と思った。

そのため、爆発物だろうが何だろうが中を開けずとも見抜いてしまうのだ。

加えて立場上、専属の警備業者とも契約を交わし、配達されるものに異状がないか二重の監査が入ったのち、警備員によって届けられるのでまず危険を回避できる。

理想としては、不審物を自分の手元まで届かせないで欲しい。が、詩歌には、差出人不明の荷物を定期的に受け取らなくてはならない事情があった。

单身、実家から離れたところで暮らしている、妹の身の回りを調査した書類だ。

この荷物を受け取った時 いや、今もずっと、誰かと話すのが億劫だったので、ろくに確認もせず、予期しない差出人不明の荷物を受け取ってしまった。

……まあいい。

詩歌は不審物を放置し、丁重に包装された画材の箱を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5513z/>

The world which is in a state of flux(仮題)

2011年12月19日19時00分発行